

学問上のメントール、小池滋先生

松岡 光治

私は広島大学の学部時代にディケンズ研究者の田辺昌美先生の影響を受けて『大いなる遺産』で卒論を書き、そのまま大学院に進んだが、入学直後に恩師が急逝されて途方に暮れてしまった。しかし、ディケンズを専門とする院生が多かったこともあり、修士1年の時に小池滋先生が、2年の時に松村昌家先生が集中講義に来てくださった。小池先生は『オリヴァー・トゥイスト』をテキストに執筆当時のヴィクトリア朝の時代精神や社会風潮をロンドン民衆の生活と絡めて解説してくださったが、その博覧強記ぶりに私を含めた受講生は哑然とするばかりだった。人間の頭の良さはサイズの大小とは関係ないはずだが、頭の大きな先生にはそれだけ多くの知識が詰まっているに違いないと愚考したものである。実は、初めて拝眉の栄に浴したのは学部3年生の時に広島大学で春季大会が開催された時で、オリヴァー・トゥイストは孤独からロンドンへ逃走した後にフェイギンの盗賊団で家庭的な人間の絆を得られた、という先生の指摘が社会に対する皮肉な逆説であることに気づいたのは、恥ずかしながらもずっと後のことだった。私は先生の直接の指導生ではないが、院生として集中講義を受けて以来、(私が勝手に思っていることだが)先生は学問上のメントールとなった。



1980年の集中講義後の打ち上げにて(広島・酔心、小池先生49歳)

日本ギヤスケル協会の全国大会は、以前は実践女子大学の日野キャンパスで開催されていた。20世紀最後の年だったと思うが、大会の懇親会に続いて大野龍浩先生と私は駅前で小池先生と一緒に二次会をさせていただいた。そこで先生が1986年に岩波文庫から出された『女だけの町——克蘭フォード』の話のうちが、ちょうど名古屋大学の教養英語の授業でギヤスケルの短篇を使っていた私は、先生の励ましもあって『ギヤスケル短篇集』を上梓することができた。2006年の渋谷キャンパスにおける例会では、小池先生の講演「『克蘭フォード』は落語的ソープオペラ」に続いて、その年に招待された英国本部の事務局長、ジョウン・リーチ女史の講演“Knutsford and Cheshire in Elizabeth Gaskell’s Life and Works”を拝聴できた。その翌日、犬山市・明治村の観光に同行したとき、鉄道史研究者でもある小池先生の講演はいつも日本の鉄道らしく時間厳守で定刻通りに終わる（とは先生自身の言葉である）、と私が伝えると女史は破顔一笑してから、『克蘭フォード』とソープオペラの類似性の指摘に感心しておられた。

松村昌家先生が初代会長として2001年に創設された日本ヴィクトリア朝文化研究学会では、私もホームページ担当者として尽力させていただいたが、一番の思い出は2007年大会の「二つのジュビリー」というシンポジウムの企画で、小池先生も加えた3人で名古屋駅に集まり、話し合い後の飲み会で分不相応な時間を過ごせたことである。鯨飲される小池先生は30分ごとにトイレに行かれていたが、その際に聞かされた「君も私ぐらいの年齢になると近くなるよ」という言葉が、その時の先生と同年になった今の私には現実味を帯び、夜中に起きてトイレに行くたびに先生のことを思い出すようになった。

私が研究の対象をディケンズからギヤスケルとギッシングへ広げて行ったのは完全に小池先生の影響である。『ギッシングの世界』（英宝社、2003年）では「ギッシングとディケンズ」を、『ギッシングを通して見る後期ヴィクトリア朝の社会と文化』（溪水社、2007年）では「教育——そのタテ前と本音」という論考を寄稿していただいた。これまで先生からは何度も論文、巻頭言、エッセイの原稿を送ってもらったが、パソコンとは一線を画される先生の原稿はすべて手書きであった。200字詰原稿用紙や普通の紙に書かれる先生の文字は解読に苦勞することもあったが、枚挙にいとまがない先生の学術書、啓蒙書、翻訳の手書き原稿を出版社の人たちも喜んで解読・テキスト化されたに違いない。

小池先生は今から 60 年前のロンドン在外研究中に、それ以後のギッシング研究で中心人物となるフランスのピエール・クステイヤス先生と一緒に『ギッシング・ニューズレター』（1991 年以降は『ギッシング・ジャーナル』）を創刊されたが、1989 年にはクステイヤス先生とエレヌ夫人を日本に招待され、当時はまだ先生の指導生だった金山亮太先生をはじめ、多くの日本人研究者やギッシング愛好者に紹介されている。2018 年にクステイヤス先生は 88 歳の誕生日直後に逝去されたが、ちょうど『ディケンズとギッシング』（大阪教育図書）の出版準備をしていた私は、哀悼の意を表するために小池先生に「巻頭言」をお願いした。それから 5 年後の今年、同じ英文学研究の泰斗、小池先生もまた 91 歳で幽明境を異にされた。巨星落つの感があるが、少子化で英文科の存在意義も薄れている昨今、後輩の私たちは先生が残されたギヤスケル、ディケンズ、ギッシングの研究書や翻訳の意義を後世に長く伝えて行かねばならない。

(名古屋大学名誉教授)

『ギヤスケル論集』第33号(2023年10月1日発行)